

市内全校に「チーム担任制」を導入 業務の分担を図り、教員が学び合う環境を築く

富山県 ^{なんと}南砺市教育委員会、^{じょうはな}南砺市立城端中学校

富山県南砺市は、2020年4月、すべての市立学校に「チーム担任制」を導入。1人の教員が1学級のすべての運営を担うのではなく、学年・学校全体で学級運営を行う体制にした。教育の質を担保しながら、教員一人ひとりの負担軽減が図られるとともに、教員が互いの指導を見て、学び合いがしやすくなり、特に若手教員の育成につながっている。

自治体概要

◎ 2004年、4町4村が合併して誕生。富山県南西部に位置する。2021年4月、義務教育学校「南砺つばき学舎」を新設し、少人数クラスで一人ひとりの人間性と資質・能力を育成。2023年度からは全市立学校で特認校制度を導入するなど、教育行政改革に意欲的に取り組んでいる。

人口 約4万8,000人 面積 668.64km²
市立学校数 小学校8校、中学校7校、義務教育学校1校
児童生徒数 約3,160人 教員数 約300人

南砺市教育委員会

各学校の主体性を尊重し、多様性を保障して 学校の「活力」と教員の「働きがい」を生み出す



教育長

松本 謙一

まつもと・けんいち

小・中学校教諭、大学教授等を経て、2019年度から現職。富山大学名誉教授。

複数の教員がチームとなり、 学級運営を担当

南砺市教育委員会(以下、市教委)がチーム担任制を導入した背景について、松本謙一教育長は次のように語る。

「本市は、恒常的な教員の多忙感に加え、慢性的な教員不足が課題です。富山県の公立学校の教員採用試験倍率は4年連続で前年度を下回り、全国最低でした。加えて、本市には、20代の教員の数が多いため、ノウハウの継承や指導力向上が急務でした」

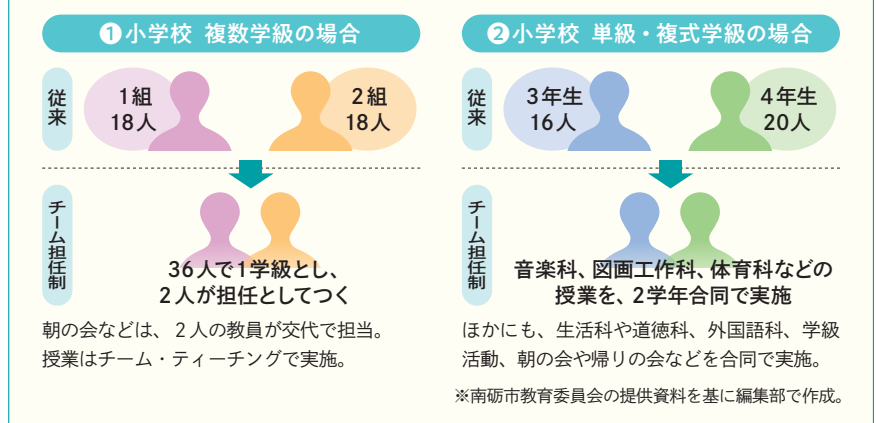
それらの課題に対し、松本教育長が打ち出した施策の1つが「**チーム担任制**」だ。1学級1担任とする従来の学級運営の方法を見直し、2020年4月から、複数の教員がチームで学級運営にかかわる体制とした。

例えば、小学校で1学年の児童数

が36人の場合、教員は2人配置されるが、2学級とせず、36人を1学級として交互に朝の会を担当したり、**チーム・ティーチング**(以下、TT)で授業を行ったりする(図1①)。ベテラン教員と若手教員の組み合わせにすることで、OJTも可能になる。

1学年1学級の小学校では、学習指導要領が2学年ごとに記載されている音楽科などの授業を2学年合同で実施。その教科を得意な教員が担当したり、TTで行ったりする(図1②)。図画工作科はベテラン教員が、

図1 チーム担任制の例



体育科は若手教員が中心に授業を進めるなど、教職歴や得意教科に応じた適材適所の指導体制が可能となった。分担することで、授業準備や教材研究に時間をかけられ、より授業の質を高められると、松本教育長は語る。

「限られた予算や人員で、最大限の効果を上げようとするなら、すべての教員の質を均等に高めようとするよりも、それぞれの教員の長所を生かして助け合う方が、教員の負担感の軽減にもつながると感じます」

各学校の主体性に任せたことで時差出勤が可能となった学校も

チーム担任制は、すべての市立学校での実施を基本方針としたが、学級数や教員数などは学校ごとに異なるため、具体的な方法は各学校に任せている。例えば、朝の会を、1・2組と3・4組で、2学級ずつまとめて行う学校もあれば、1学級単位で週ごとに担当を替える学校もある。

「4町4村が合併して誕生した本市は、山間部や平野部など、多様な地域性があります。地域の実情に応じた学校づくりを行うことが重要であり、教員が自ら考え、判断して取り組んでほしいと校長に伝えています。市教委の言う通りに動くだけでは、先生方はワクワクしませんし、働きがいも感じないでしょう」(松本教育長)

学校の主体性を尊重し、多様性を保障することが、各学校の活力を生み出すことにつながるという考えの下、2023年度から、すべての市立学校で「特認校制度」を導入。その際、各学校が自校の魅力を発信するPR動画を作成し、動画投稿サイトで公開することにした。

チーム担任制にしたことで、教員の**時差出勤**を可能にした学校もある。1学年2学級を3人で担当する場合、朝の会を担当しない日は、出勤時刻をずらすことができる。遅番の教員が部活動を指導し、早番の教員は早く帰るなど、柔軟な勤務形態を可能にした。

「チーム担任制では、これまで学級担任を持たなかった学年主任の業務が増えるのではないかといった声もありました。しかし、特定の教員に業務が集中するようであれば、チームの別の教員が『自分がやります』と申し出るなど、チーム内で助け合う関係を築いていくことを期待しました」(松本教育長)

夏季休業や冬季休業の期間は、各学校が決め、時間割の変更や、勤務時間の短縮に振り替えることができるようにした。例えば、スキー部が活発な中学校では、夏季休業期間を従来より短縮して授業日数を増やした分、11月以降は授業を5時間目までにして、部活動の時間を十分に確保できるようにした。

長期休業期間は、教員やPTA、学校評議員などの了承を得て決定するが、地域の実情を反映して、より働きやすい学校を目指している。

「他の教員から学べた」と約9割の教員が回答

今後の課題は、中学校の**部活動改革**だ。生徒数は年々減少しているものの、部活動の数は変わらないため、部員数が足りずに公式戦に出場できない部活動が少なくない。また、顧問を務める教員の約7割は、担当する競技の経験がなく、部活動の指導が負担になっているケースもある。

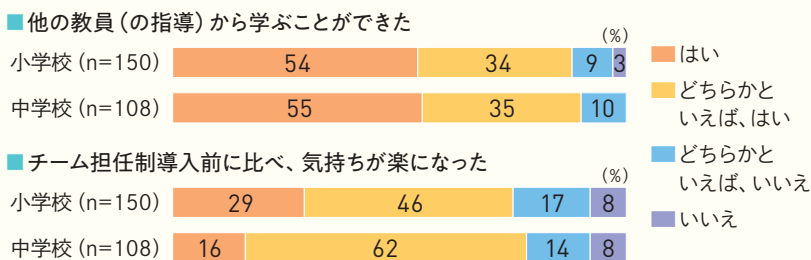
そこで、各学校の部活動を統合して拠点校を設けることで、部活動の種類を維持しつつ、市内全体の部活動の数を減らす方策を構想している。柔道部はA中学校、剣道部はB中学校など、学校ごとに実施する部活動を振り分ける方法だ。競技経験のある教員が拠点校で技術指導を担当し、競技経験のない教員は生徒指導を担当するといったように、適材適所の人材配置を行う。

市教委が実施したアンケート調査では、小・中学校ともに8～9割の教員がチーム担任制に肯定的だった。さらに、約9割が「他の教員から学ぶことができた」、約8割が「導入前に比べ、気持ちが楽になった」と回答。チーム担任制が、導入目的である、教員の学び合いや負担感の軽減に結びついていることが分かった(図2)。

「制度上守るべきことと、変えてもよいことを押さえておけば、工夫次第でできることはたくさんあります。教育の質が向上し、教員の負担が軽くなることなら、学校現場からどんなアイデアを出してもらい、その実現を教育委員会が後押ししていきたいと思います」(松本教育長)

図2 教員へのアンケート結果

(2022年1月実施)



※南砺市教育委員会の提供資料を基に編集部で作成。

1学年を3～5人で受け持つ体制で、負担感の軽減と教育の質向上を両立

一部の業務をローテーションにして、互いに指導を見合う

南砺市立城端中学校は、市の中心部に位置する中規模校だ。教員構成は20代と50代がそれぞれ3割を占め、30～40代が少ない。そうした中、同校のチーム担任制は、各学年に、学年主任と学年担当を数人ずつ配置する体制とした。1年生は2学級に教員3人、2年生は2学級に教員5人、3年生は3学級に教員4人とし、各教員は「**学年スタッフ**」として、担当学年の全学級の運営にかかわる。

教員が協働で運営する主な業務は、朝の会と帰りの会、給食指導だ。1年生の場合、3人の教員が1週間ずつのローテーションで担当(図3)。担当外の教員は、隣同士にある2つの教室を廊下から見て、ベテラン教員が若手教員に助言したり、若手教員がベテラン教員から学んだり、OJTの役割も担う。また、担当外の時間は、授業準備や時差出勤などにも利用している。

道徳の授業もローテーションを組み、3人で3週間ごとの担当とした。年間35時間を分担するので、教材研

究を集中して行える上に、同じ内容の授業を2学級で行うため、授業の質が高まるという。

チーム担任制は教員・生徒の双方にメリットが大きいと、教務主任の藪陽介先生は語る。

「生徒は複数の担任がいるような感覚で、悩みを相談するにしても、より話しやすい教員に話をしています。また、学級に落ち着きが見られない時には、ローテーションにかかわらず、同じ教員が2週間続けて朝の会を担当するなど、柔軟に対応しています。教員が1人で問題を抱え込まずに済むため、担任業務に対する負担感が減りました」

成績処理や保護者対応も分担し、心理的負担を軽減

成績処理や保護者面談なども学年スタッフで分担するため、教員1人が担当する通信簿や保護者の数が従来より大幅に減った。それによって、課題だった若手教員育成に手応えを感じていると、北島一朗校長は語る。

「先生方は、通信簿の記入や保護者の相談にきめ細かく対応できるよう



設立 1947(昭和22)年
学級数 9学級(うち特別支援学級2)
生徒数 199人 教員数 19人



校長
北島一朗
きたしま・いちろう
同校に赴任して3年目。



教務主任
藪陽介
やぶ・ようすけ
同校に赴任して2年目。
美術科。

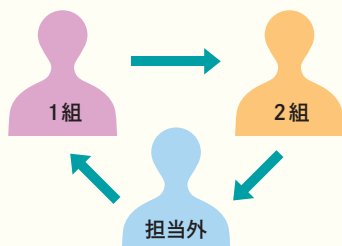
になりました。担任業務にチームで取り組むことで、互いに相談しやすくなり、心理的負担が大きく軽減されています。教育の質を担保しつつ、若手教員をじっくりと実践的に育てられていると感じます」

週1回は、1時間目に担当教科の授業を入れないよう時間割を工夫し、全教員の時差出勤を可能にした。また、夏季休業期間を従来より1週間短縮。その分、定期考査の前週を5時間目までとしたり、大会前の部活動の時間を確保したりしている。

一方で、週をまたぐ生徒の提出物の管理など、教員間の連携がますます重要になったと、藪先生は語る。

「事情があって提出できなかった生徒を頭ごなしに責めるようなことがあっては、生徒からの信頼を失いかねません。週1回の学年会を始め、日頃から情報を共有するなど、チーム担任制のよさを生かして生徒の成長をしっかりと支えることで、教員の働きがいにもつなげていきたいと思っています」

図3 チーム担任制 1年生の場合



■朝の会や帰りの会、給食指導を分担

1組→2組→担当外のローテーションで、1週間ずつ担当する。

■成績処理や保護者面談などを分担

2学級の生徒数を3分割して担当する。

■時差出勤の実施

朝の会と1時間目の授業がない日は、勤務時間を9:15～17:30にもできる。

※城端中学校の提供資料を基に編集部で作成。